



Title	身体運動の主観的構成：身体運動の新しい概念
Author(s)	矢野，徳郎
Citation	北海道大學教育學部紀要，75
Issue Date	1998-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29554
Type	departmental bulletin paper
File Information	75_P77-81.pdf



身体運動の主観的構成

—— 身体運動の新しい概念 ——

矢 野 徳 郎

The subjective contraction of physical movement

—— New concept of physical movement ——

Tokuo YANO

I. はじめに

これまでスキー、テニス、および日常生活における具体的な運動を取り上げて、それぞれ、各論的に議論してきた。そこでの議論で大切なことは、運動を対象化する従来の考え方では身体運動は捉えられないと言うことであった。しかしながら、スポーツ種目から日常活動にかけて運動種類が増えるにつれて、議論が散漫になってきた。その結果、自分の感じている身体運動観を言葉にしよとしたが、必ずしも成功したとは言えない状態であった。また、当初は考えていなかったことが徐々に明らかになったので、基本的な考えを発展させる必要が生じた。さらに、これらの議論に関する周辺領域での科学的な研究成果も知見として得られるので、それを参考にすることが出来るようになってきた。そこで、本論ではこれらのことを考慮して、新しい身体運動に関連する概念をここで簡潔にまとめた。

II. 運動の実行

1) 外界性

我々は、外界が客観的に自分の意識とは関係なく存在していると思っている。このことから、我々は、外界の全てを見ていると思っている。しかし、例えば、探しものをしてる時に、他人からあり場所を聞いた途端に発見でき、かつその場所が目の前であるという場合を、だれしもが経験したことがあると思う。また、例えば、実験室に実験器具や実験整理のためのコンピューターや本があった場合、初めてその部屋に入る人に、ここはコンピューター室であると教えるとコンピューターは目にはいるが、その他のものはあまり目に入らないという場合もある。これらは、外界の全てを見ていえるというのではなく、主題に応じてみていること、また、部屋の中の相互関係として見ているということを示唆している。

自然科学では、この主題性や関係性を解体して、客観的な外界理解を行ってきた。その成果は説明するまでもないが、その弊害は自然環境の汚染や生態系の破壊などに現れてきている。この問題は、従来の自然科学では、系の外からの観察に基づき、かつ原子論的な理論形成によっていたことによると考えられている。そのために現在では、系の中での現象理解の立場に立ち、かつ関連性を重視した理論形成が検討されてきている。この検討の成果は将来まで待たねばならない。

ここでは、主題性と関係性を経験的な立場から考えていきたい。例えば、雪を考えると雪の結

晶等から雪を捉えることができる。これは、観察者と雪とは直接的には関係していない。これに對して、例えば、スキーの滑り方によって雪質を捉えることが出来る。これは、自分の運動性(技能)に關係して雪を直接的に理解しているということである。この理解は、理解と実行が同時に生じていて、運動の失敗が無理解であるということである。また、身近な例では、人に殴り掛かったりすれば、それは、その人の殴り掛かった人への理解の仕方になる。さらに、広範に外界へ関わる例として、自然の中で文明から離れて生活する場合を挙げることが出来る。これは、生きて行くという主題の基に外界の關係性を技能的に作っているという例になろう。このように、運動性や技能が、即、対象の理解に繋がっていて、かつ外界は主題的構成として私達に現われてくるものであると考えられる。

2) 主体性

運動性を考える場合、他者の運動を捉えようとするのが一般的である。この場合には、運動の動作と動作対象が捉えられる。このなかでも、理論構成を主題性や關係性で形成すれば、従来とは違った運動観が生まれる。しかし、自己運動の立場では、もっと大きく違った問題が現れる。それは、対象は見えるが、自分の動作が見えないということである。例えば、本をめくる時に、本は見えるが、めくる動作には意識は向いていない。一般に、自分の動作は、人から指摘された場合やビデオや鏡を見た場合のような身体を対象化した時に分かるものである。つまり、ある状況化での動作は、体が自律して行っていると言える。

従来は、この無意識的動作は体の自律というよりも自動化であると考えてきた。これは、意識的に身体を調節しているのが、何度も同じ動作を行っているとその動作が無意識に行えるようになると考えていたからである。確かに、大人の場合にはこの方向性で動きを作るので、これが正しいと思ってしまう。しかし、生まれてからずっと運動を習得し続けていることを考えると、意識的動作から無意識的動作が出来るとは言えない。また、意識できるのは動きの一部であり、その他の大部分は意識できないが、自動的に行われているのが普通である。さらに、動作は毎回異なっているので、自律化では対応できない。つまり、動作の大雑把なことは予定することができるが、その状況化で遭遇する新しい出来事は、自律した運動で対応していると考えねばならない。

もう一つの大きな違いは、体の境界である。他者の運動では境界は皮膚にあると考えるが、自己運動では、このことは対象化と主体化によって決まると考えなければならない。例えば、テニスでボールを打つ場合、対象はボールで、ラケットは身体の一部のように扱われている。その証拠に、神経支配のないラケットの感覚が取れる。また、逆に前腕を運動する場合、前腕は対象であり、動かしている筋は上腕である。つまり、体の一部を運動させようとするときには、その一部は外界として対象化され、その残りの多くは主体として自律した運動を主題のもとに調節していると考えられる。

3) 階層性と両面性

運動は毎回違うと考えると同時に、ある纏まりもあると考えてきた。例えば、歩行は状況に応じて毎回違うと考えられるが、この違いにも関わらず同じ歩行であると考えられる。これは、厳密な定義があるのではなく、後に述べる再帰的な規定性から来る言葉的分区によっていると考えられる。この議論は運動学習のときにするとして、ここでは言葉的分区と一回性の両立について

考える。

従来の自然科学では、外部に現われた行動や技、あるいは内部で生じる知覚が、現象の事実として扱われるので、知覚や行動が実体からなると考えるのは当たり前であった。しかし、最近の自然科学的研究では、例えば前腕を前後に動かす実験では、その運動が一回性であると報告されている。これは、体の自律性を推論さすものである。したがって、実体としては体の自律であると考えられている。ただし、この実験で忘れられていることがある。それは、この実験では、前腕を前後に動かす等という実験条件、つまり、ここでいう言葉の規定が含まれているということである。したがって、実験全体を見渡すと現実の運動は言葉の規定と体の自律から階層的に成り立っていると考えられよう。

我々は、運動を予め予定したり、あるいは計画したりすることが出来る。これは、実際の運動ではなく言葉の組立として計画しているので、実際に運動できないことまで、例えば、空を飛ぶことでさえ考えることが出来る。しかし、実際の運動は体の限界内でしか出来ないし、また外界の多用な変化に対応しなければならない。これは、体の自律に求めるしかない。この両者の階層は互いに関連しあって現実の運動を作るのであって、一方的に言葉の組立通りになっているのではない。これは、スポーツのように相手が多用に変化する場合には、この両者の関係がはつきりする。さらに、外界性と主体性もそれ自身では現実の運動を可能に出来ないので、外界性は主に知覚側を捉えた場合で、主体性は主に行動や技を捉えた場合であると考えられる。

III. 運動学習

1) 再帰性

我々はスポーツを学習する場合、例えば、テニスを学習する場合、ストロークやボレーなどの動きを区分して、それぞれを学ぶ。また、動きは、その構成要素の動作に分解して学ぶ。つまり、最小単位、から全体が構成できると考えている(原子論的学習論)。しかし、実際の動きは必ずしも言葉的な区分にしたがっているわけではなく、高いボールを打つときにはボレー的なストロークで打つ場合もある。したがって、この区分は厳密なものではなく、前述した言い方では、予定できる部分と不確実な部分が同居している、ある種の収束単位であると考えられる。

また、我々は、例えば、スキーを学習する場合、予めスケート等を経験しているとスキーの学習が実施しやすいという場合がある。これは、運動学習がスキーという閉じた系でのみ起きているのではなく、他の系に開いていることを意味している。つまり、原子論的に運動学習が起きると考えているのは、運動を対象化して、それが学習対象になると考えていることから生じているのであって、現実の学習を捉えたものではないと考えられる。

このことは、言葉を学ぶ場合と対比するとよく分かる。外国語は、母国語の意味との対応と文法から学ぶと言う場合である。これに対して、母国語は大して文法も知らないし、対訳もない状態で学習している。つまり、母国語は母国語の中で学んでいる。これは、ちょうど辞書を思い出せば分かりやすい。ある単語を辞書で調べるとその意味が、その母国語で説明されている。不思議なことに、単語を文章で説明しているので、単語の単位と文章の複雑度は、常識的には単語が文章より簡単であると考えられるが、このことが成り立っていない。つまり原子論的な考え方ではなく再帰的な構成であると考えられる。既に分かっている単語を秩序化した文章で理解するということである。また、その新しい単語を、文脈の中で使うということである。

運動学習でこのことを考えるとある系の運動学習とは、既に持っている動きや動作を秩序化し、

かつその系の中で活用するということになる。

2) 身体表現の相互作用性

ここまでの前提として、対象は意識できるが、その補完的な動きは見えないと考えてきた。それにも関わらず、動きの学習がなされる。これについて考えたい。

普段、我々は、自分自身の動きがどうなっているかは知らないが、それが必要な状況が生じると無意識のうちに運動を生じる。これが他の人と違う場合にも自分自身では気がつかない。しかし、他の人に指摘されるとそれを気遣う用になる。つまり、自分の動きは見えないけれども、受け入れられるか否かで自分の動きを見ているということである。

もし、自分の動きが違っているのであれば、それを修正する方向に向く。まず、他者の正しい動きを見て、自分に既にある動きを基づけにして、自分の動きを作る。この時、間違っているときは、自分では分からないので、他者の修正が必要になる。そこで、次に、その修正のもとに、新たな動きを作る。この時に、動きが単に言葉的な規定として厳密なものであれば、新たな動きの自由度は少ないが、前述したように、体は常に新しい状況に応じた自律した動きを作るので、多用な形が現われる。このように、運動は、既にある動きを想定して出来上がるのではなく、他者の動きを見ることと自分の実行とが補完的になるような形で、かつ言葉の規定性と体の自立性による相互作用によって、形成されると考えられる。

IV. 体育

1) 文化の枠組み

運動やスポーツを実施することが、なぜ体を育てることになるのか。この疑問を次に考えたい。

これは直接的には、心臓や肺や骨格筋が強化されるということであろうが、この答えは、体を自然科学的に捉えることから来ている。現在、自然科学でも生きた身体を捉える試みがなされているが、基本的には体を物質的、機械的に捉えている。それでは、動くということと体をどのように統一して捉えればいいのかであろうか。

運動は、ある状況下で、もの（物と者）との関わりで現われてくる。この物に対する運動の現われ方は多用であっていいはずであるが、ある一様な現われ方を示す。これは、その運動を学習したということからのみ来るのではなく、その動きを行う集団では、それが適切な運動であると思われていることから来る。例えば、本を足でめくることは行儀が悪いと言われてしまう。また、者に対する運動では、相手に分かってもらわなくてはならない。つまり、ものに対する運動の成立は人に承認されることを前提としているので、運動というより身体表現である。

この身体表現とは何であろうか。一つには、大勢の人が同じように習慣的に振る舞うということである。これには、道理が必ずしもあるわけではない。しかし、この習慣は、他の人の振る舞いから、その人が置かれている状況を判断できるということを内在している。例えば、電車の運賃表示版をきょろきょろ見ている振る舞いから、その人が行き先までの値段が分からないなどの判断を下すことが出来る。もう一つは、この振る舞いは、何時も生じているのではなく、状況に応じて表出するものである。運動自身を持っているというよりも、可能な文化的表現形式の蓄積である。

また、この蓄積が、体を育てるということであろう。

2) 身体表現の時間性

以上見てきたように、ある文化の枠組みを身に付けるということは、身体表現を身に付けることである。これは、他者がある状況下で、その動作を理解できることを前提としている。つまり、同じ言葉を学んで互いの理解を得るように、身体表現もその中で流布している表現を身に付けると互いの理解が得られると考えられる。そのなかで、我々は、個人的な表現を行い、個人的な体験を得ている。これらの体験は個人に固有に生じたものであるが、同じ表現の中では互いに理解が出来る交換可能な体験である。また、特に感動を得た体験は記憶に残る。この強い印象は単に一般的なスポーツの記述とはことなるものである。つまり、一般的な物語に印象的な出来事が挿入されている。これは、スポーツにおいては、物語を修飾する技術や体力である。実際、体力や技術レベルの高いオリンピックや国際競技で得る感動は大きいものであることから、このことは分かる。

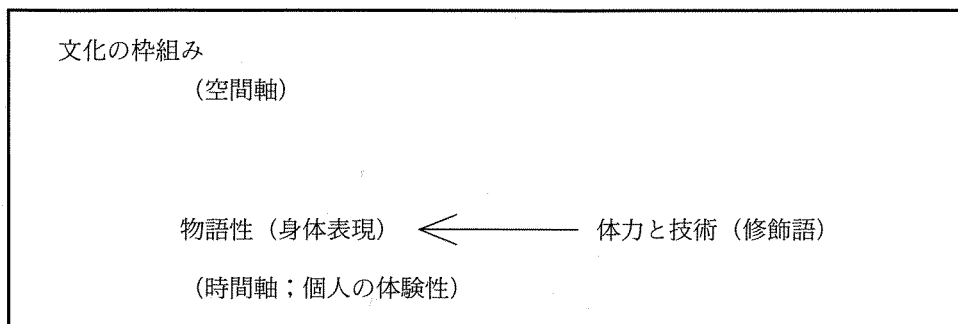


図1. 体育の構成要素

以上のことから、体育は、身体的文化を身に付けて、互いに分かりあい、その中で個人的体験を生きるということに集約できよう。

参考文献

- 市川 浩 (1992) 精神としての身体 講談者
 浜田寿美男 (1995) 意味から言葉へ ミネルバ書房
 生田久美子 (1990) 「わざ」から知る 認知科学選書 14 講談者
 清水 博 (1994) 生命をとらえなおす 中央公論社
 Uexkull, J (1995) 生命の劇場 入江重吉 寺井俊正 訳 博品社
 Weizsacker, V (1975) ゲシュタルトクライシス 木村敏 浜中淑彦 訳 みすず書房
 山田憲政 (1996) 協調動作の自己組織性 博士論文 北海道大学教育学部
 矢野徳郎 (1994) 身体運動の主観的構成 —— テニスの分析 —— 北海道大学教育学部紀要 64 ; 1-8.
 矢野徳郎 (1995) 身体運動の主観的構成 —— スキーの分析 —— 北海道大学教育学部紀要 68 ; 111-119.
 矢野徳郎 (1996) 身体運動の主観的構成 —— スポーツ科学から日常活動の分析へ —— 北海道大学教育学部紀要 72 ; 133-142.